よらねかね小合

2018.1.1　第54号

題字 菅井松雲
毎日書道展審査会員
小合書道教室講師

発行者／小合地域コミュニティ協議会
発行人／田村由美子
編　集／総務部

地域の人口動態
平成29年11月末現在

世帯数	1,234戸
男	1,849名
女	1,961名
人口	3,810名

新年のごあいさつ

小合地域コミュニティ協議会会長
田村 由美子

謹んで新年のお喜びを申し上げます。

日頃より、小合コミ協の運営に対し絶大なるご協力をいただき、深く感謝申し上げます。

昨年は、「小合地域コミュニティ協議会創立20周年記念式典」が挙行されました。

平成9年4月に小合地区活動センターとして発足し、平成16年に小合地区コミュニティセンターとして名称変更し20年が経過しました。

その間、多くの先人達の並々ならぬご努力と功績を紐解くことが出来ました。

そして、先人たちの築いた歴史や伝統文化を大切にし、安心・安全な小合地域になるためには、小合地域全体で協力という連携がとても重要になってきます。

小合地区の14の自治会・町内会、小・中学校3校、その他各諸団体との連携も、それぞれの分野で大きな成果をあげてきております。

特に、小合自主防災訓練は、自分の命を守り、家族の命を守り、地域の安全を確保するためには、連携する事の大切な取り組みです。

福祉に関しましても、少子高齢化の中で浮上する様々な問題に対し「ささえ合いのしくみづくり」が今後とても大切になってきます。

団塊の世代（第一次ベビーブームの世代）の人が、後期高齢者になる2025年に起こるだろう問題に対し、国策に準じ取りくむ必要があります。「5人に一人が高齢者である」「介護保険法の改正により、要支援1・2の人はなかなか施設に入りづらい」「地域で仲良く支え合いが必要である」「介護予防で健康寿命を延ばす」等、2025年になったら考えるのでなく、今から少しずつ問題解決の糸口を見つけていかなければなりません。

今年度の残る事業に対しましても、努力を惜しまず、精一杯皆さんと一緒に進めていきたいと思っております。

高齢者になっても、住み慣れた小合で安心して暮らしていける方策を、皆で考えていきましょう。

安心・安全な優しい町づくりを目指し、新たな決意をしております。どうぞ、皆様のお力をお貸しください。

結びに、皆様にとって今年も良い年でありますよう、心よりご祈念申し上げ新年の挨拶といたします。

小合地域コミュニティ協議会創立20周年記念講演　要旨

「小合 花の園芸史」

県立植物園　倉重 祐二

1. 新潟県の花卉園芸　産地の特徴

・全国第2位の鉢物花木生産県。主力はアザレア。
・新潟市秋葉区、南区の信濃川沿いに150軒の花生産農家
・アザレア、シャクナゲ、ボケ等は日本一の生産量
・景気の低迷に伴う生産額の減少

2. 江戸時代の花卉園芸

・江戸時代中期以降に江戸や大坂を中心に花卉園芸が流行
・新潟においても1700年代には園芸植物が多数栽培された
・新津では水害の多い稲作地域で、換金植物として園芸植物の栽培がはじまる
・新潟市秋葉区、三条市保内で近代の花卉生産の基礎が築かれる

3. 近代の小合地区の花卉園芸

・本県の花卉、花木園芸産業は小合地区で発展。明治から現在まで日本を代表する産地
・ヤブコウジ　現在の価格で1000万円以上の金額で取引され、投機の対象となった。生産者は植物が投機の対象になるほどの利益を生む可能性があるという意識を持った
・ボタン　ボタン（木）の枝をシャクヤク（草）の根に接ぐ繁殖技術の開発、新品種の育成、販路の拡大によって、近代的生産体制と新潟ブランドが確立
・チューリップ　高投資・高収益型の生産、輸出（外貨の獲得）を目的としたはじめての花卉。輸出から国内販売へ。球根供給地から付加価値の高い切花生産への転換。
・明治、大正時代には規模の小さな生産地であった新潟県は西洋の植物を積極的に導入

4. 歴史から見えること

花卉産業の拡大には理由がある

西洋花卉の積極的な導入・流行の創出・新品種の作出・栽培・繁殖技術の革新販路の拡大

日本の花卉園芸の発祥の地 小合

コミ協創立20周年記念行事を彩る

大鹿神楽保存会による「神楽舞」が祝宴を盛り上げた

式典の開会を宣言する田村会長

小合は日本を代表する花卉産地である。この地域における生産販売の始まりはサザンカ・ボケ・キンモクセイなどが行商された。江戸中期（1764―1772）までさかのぼると伝えられる。明治初期の小合村ではキンカン・ミカン・牡丹・芍薬・五葉松・ボケなどが小規模に生産されていた。しかし、明治中期から大正時代にかけて花卉生産は大きく飛躍した。このきっかけを作った植物が牡丹・ヤブコウジ・西洋花卉である。小合村、小須戸町では苗木仕立て、薬草、薬木仕立て農家の副業として記されている。『両組産業開物之巻』※1

小合の園芸を知るには、吉田千秋の「園芸日誌」などの資料は1級の資料であった。千秋を外しては小合の園芸を語れないのである。と倉重氏は言う。

四柳前会長の功労表彰

新津の「1・6定期市」
（江戸時代＝1833―1844）

生産した草花は地域の「お祭り」などで販売をしていた。その後、新津の市に販売するようになった。大正5年5月16日、21日、大正6年6月12日に出かけて購入している記録がある。このことから「新津の市」は現在も1と6のつく日に定着して新津駅近くの駐車場で行われている。

「ボケ（放春花）」ブーム
（明治末―大正初期）

小合村を発端として全国にボケのブームが起こる。加えて芍薬の名花「花香殿」が小合村の長尾善作により作り出された。また「ゼラニウム」が大流行する。別名「天竺葵」とも呼び葉に斑の入る品種がもてはやされ、大正5年ごろには全国に人気を呼び高値で取引された。このころより「温室も」建設された。

ヤブコウジ

「紫金牛」※2ヤブコウジと読む。冬に赤い実が映える。万葉集には山橘（やまたちばな）として読まれている。明治時代には新潟に端を発した全国的に投機の対象として大流行した植物である。最も高かったのは現在の価値にして1000万円以上で取引されている。ヤブコウジをさす行事として京都の上賀茂神社の卯杖の神事に残る。

小合と「チューリップ」

小合中学校の校章にもなっており、小合史を語ると必ず話題になる。今回、コミ協記念行事で公募して採用されたロゴマークは、「チューリップ」が基本である。

新潟県における「チューリップ」栽培の歴史は、明治37年来迎寺村（現越路町）で成功した。球根の商業生産は小田喜平太が大正7年に導入し、翌年より生産開始した。これが定説であるが、千秋の「園芸日誌」によると大正5年以前と記録されている。「チューリップ」の繁殖は、3年必要であり商業生産が始まったのは、明治末から大正初めとされる。その下地があったので産地化に成功したのであろう。

※1 小泉貴軒　幕末期の地理学者
安政6年（1859）市ノ瀬新田の名主
※2 中国語の表記（漢名）

作りやすく、オリジナル商品の開発も

日本園芸研究会

小合の園芸について勉強会（2009・12～）があり、月1回コミセンや木口事務所で開催している。挿し木・種まき・接ぎ木などや増殖にかかること、さらに経営や灌水・用土のこと、品種の選択・交配によるオリジナル商品の開発も勉強する。（代表 上田裕一　会員8名）

勉強会をするには講師がいる。外部から呼べば費用等が大変である。身近に木口一二三氏（1933～）と言うすばらしい講師がいた。「料理屋の長男に生まれながら、好きな花作りで、一生送れたら幸せだな」と子供心に念じ、17歳のとき、長尾草生園※に住み込みで花卉栽培を学んだ。以下講師の経歴を中心に研究会活動の概要を紹介する

園芸研究会とはなにか①園芸とは花卉園芸である。花は平和の象徴であり、広い視野で技術知識の追求と新種の開発、育成導入と園芸会の先駆者でなければならない。②皆さんは若いし業績を積み上げる時間はある。③「芝蘭の交わり」という。意味はお互い感化し合い高め合へる間がら」という。④また義務として年1回は文集を提出する。内容は失敗談、回顧談など。もちろん成果の記録もである。勉学には「一つの論文の完成は百の学問より有益である」と言われ、このことと通じることだろう。会員の研究テーマ紹介する。

新潟県園芸誌略年表

【明治13年】オランダから明治政府に27種類の球根類が寄贈されたが、本県など府県に配布した記録は見当たらず。（当然この中にはチューリップもあったと思われるが開花したとの記録がない）
＝以下昭和まで略＝
【昭和5年】第2回全国花卉園芸業者大会・全国花卉園芸共進会が4月27・28日新潟市で開催
【昭和7年】県農務課技師小山重がチューリップ等球根事情調査のためオランダに出張、帰路アメリカに立ち寄り県産の球根を紹介した
【昭和10年】本県から米国へ24万球を輸出した。中国満州にチューリップ等10万球を輸出した。河渡球根組合（会長・上村卯一郎）が設立され栽培が始まった
【昭和11年】小合村の田中忠一が温床紙戸を使用してチューリップと水仙の促成切り花栽培を始めた
【昭和12年】県花卉園芸生産組合設立、根岸村及び新潟農園以外の球根類を販売あっせんした
【昭和14年】県産チューリップ927，750球（24，423円）をタキイ種苗・三菱商事・新潟農園を通じて輸出した
【昭和16年】米国の対日資産凍結によりチューリップの輸出は停止、球根の一部は食用にされた
【昭和20年】（終戦）小合村でチューリップ130品種を保存圃場（管理者・田中清二郎：子成場）で栽培を続けた
【昭和21年】小田喜平太逝去（3／22）
【昭和22年】「県花卉球根輸出協会」（会長・桑野潔）が設立された
【昭和23年】県産チューリップ球根18万球が戦後初めて米国に輸出された（略）
【昭和24年】米国からチューリップの優良品種としてゴールデンハーベスト・アルビノ・レッドピット・ミセスジョンテシェバース等が逆輸入された
【昭和25年】県農林部は小山重著「輸出チューリップの栽培」を刊行した。オランダから新品種が輸入され、本格的に品種更新が始まった（略）
【昭和26年】小山重逝去（5／4）戦前のチューリップ球根生産など本県園芸の指導者
【昭和27年】県はオランダから新品種を輸入し原種圃を設置した（略）
【昭和28年】県花卉球根農業協同組合（組合長・栗原祐一）が設立された。県はチューリップの国内と輸出価格差に補てん助成して輸出を振興した（略）
【昭和29年】全国花卉球根振興大会が小合村及び臼井村で開催された。県下のチューリップ栽培は戸数2，000戸、面積89町歩で1，350万球が生産され、戦前の最盛を超えた（略）
【昭和31年】農業改良資金に輸出向けチューリップ種球導入事業が創設され、球根生産の拡大に寄与した
チューリップ球根腐敗病が激発し、県は対策協議会を設置、新潟大学農学部に防除法の確立を委託した
【昭和34年】7月水害と台風7号で園芸作物に被害（略）
【昭和35年】長井子三郎逝去（12／6）白根市古川・大正末から中蒲原郡農会・新潟県職員、戦後は県種苗農協長・花卉球根農協長・白根市長など歴任し県園芸、なかでも花卉振興に貢献した
【昭和36年】豪雪・中越地方に豪雨・第二室戸台風など災害続発、県果樹苗木生産者協議会（会長・大野徳三郎）発足。県は「チューリップ耕種基準」にはじめて「促成栽培指針」を定め促成切り花の普及をはじめた。チューリップ球根は県花卉球根農協が集荷し設立された㈱県花卉球根協会（会長・長尾次太郎）の会員が販売（一元集荷多元販売）することに協定された。県花卉球根対策協議会がチューリップ球根販売のトラブル協定機関として発足した
【昭和37年】かき「平核無」の原木（古田の川崎家）が県の天然記念物に指定された（略）
【昭和38年】チューリップを県の花に制定（8／23）新潟市で県花卉園芸振興大会を開催し県立フラワーセンターの新設などを決議した。第一回県チューリップ圃場品評会開催。県園芸試験場はチューリップ新品種「プライドオブニイツ」などを命名発表、スカシユリの育種を本格的に始めた。新潟と埼玉県警は県花卉球根検査条例違反を摘発した
【昭和39年】春の突風、新潟地震、7．7水害など災害による被害（略）
※新潟大学農学部荻屋薫教授・石沢進助手の「ユキツバキの分布とその変異の調査研究」に新潟日報文化賞
この年、栽培史上最高の作付面積298．5haを記録（富山県は41年200haを超えた）（略）
【昭和40年】第一回チューリップまつりを新潟市で開催第8回（47年）までつづく（略）
【昭和41年】下越を中心に7／17水害発生（略）県の木に「ゆきつばき」が制定された
【昭和42年】8／28羽越水害。県経済連がパッケージ球根の販売を

●「クリスマスローズ」の育種でスタート
●「ノボタン」を作りやすく新品種の開発と営利性の追求」
●「クリスタルアイス。クリスマスローズ。ゲラニウム」の3本柱で挑戦
●「シベリアアヤメ」の交配・育種への挑戦など。

また、初心忘れずと「ブルーカーパス」を屋号にしている方もいる。頑張ってほしい。

先日事務所を訪ねた。写真・古書・海外の資料などを手に情報交換をしていた＝写真＝講師の木口氏は旧制中学のとき園芸書「皐月とアザレアの作り方」※2との出会いがあった。その後、縁があり「長尾草生園」に見習いに入ることができた。農作業は辛かったが花と植物との出会いは新鮮であり喜びが大きかった。自分なりの交配もできて一定の成果を上げることができた（王冠・竜田錦・大八州…）この勢いは東京オリンピック（1964）まで続いた。

しかし、このころより消費者の求めるものの変化の兆しが見られる。そんな中、昭和46年独立。ゼロからのスタートである。あるのは新感覚の品種の開発と独自の商品開発の意欲である。持ち前の好奇心と実習と現場で身に着けた技術を資産にして独自の花作りを追及する。鉢物シャクナゲ、山野草、原種ツツジ類を中心に生産して3年で軌道に乗せた。

第1次オイルショック（1973）で皐月ブームの最盛期は終わる。物不足など大変な状況になっていたが、当園は小規模経営ゆえに打撃は小さく1977年頃にはオイルショックも沈静化した。このころより〝交配実生〟への挑戦を始める。

1979年中国の秘境雲南に採取※3の旅へでる。日本の植物の原点である中国奥地。プラントハンターとしての血は騒ぐ。新しい何かを作りたい。作らねばならぬ。との思いが英国や南米ギアナ高地など訪ねること数十回。その情熱は衰えを知らぬ。育種家木口氏の根性なのであろう。アザレア、皐月に黄花・青花を咲かせたい。有鱗片石楠花の利用を考える。ミニシャクナゲのオリジナル商品はできるが耐暑性がなく続かない。弱点は残る。

集合住宅の復旧によりベランダ園芸に焦点を当てる。1991年に「クリスマスローズ」を英国より持ち帰る。交配をくりかえして1994年「丸弁・横向き・ややうつむき加減」の特徴の「木口交配」の誕生である。

園芸研究会とは「園芸植物の栽培とその技術についてよく調べよく考えてより良い作物作りの真理を究めるための会」と説く。時代社会の変化に適応する感覚も大切と言う。仙寿園はサボテンからくる名称という。研究と実務。年に1回は論文を作り新潟のまたは日本の園芸界を発展する力にもなってほしいと発言している。木口氏は元気である。健康で「次世代に引き継ぐ務めも果たすことを祈る」。

「日本園芸研究会」。新潟市は政令指定都市になったが小合の片田舎での名称としてはどうかと疑問を投げかける人もいるそうだが「日本の園芸の発祥地は小合である。」という伝統が小合の〝風土〟に生き続けているという思いを強くした。

※1　1982／5／15新潟日報夕刊
※2　石井勇著、誠文堂書店、昭和3（1928）
※3　ワシントン条約（1973）現在採取不可

編集後記

明けましておめでとうございます。昨年は題字を一新。「よらねかね小合」はいかがでしたでしょうか。お読みいただいての感想やご意見をお聞かせください。

これからの広報誌に生かしていきたいと思います。今年は皆様にとって素晴らしい一年でありますようお祈り申し上げます。

総務部　M

はじめた

【昭和47年】県は「花卉栽培指針」を策定した。花卉球根流通機構再編のため『県花卉球根協議会』（会長・栗原祐一）が発足。県花木振興協議会（会長・志田保）

【昭和48年】全国花卉研究協議会を新津市で開催（8月）。円が変動相場制に移行してチューリップ輸出は大幅に減少。第一回花卉球根生産振興大会を新津市で開催（略）

【昭和50年】卉花木の生産が大きく伸び、販売額は過去5ヵ年で2，88倍の28億7，000万円に達した

【昭和52年】庄瀬農協管内でチューリップ切り花生産が始まり生産拡大の端緒。県経済連が「くみあい花卉流通センター」を三条市保内に設立した（中略）

佐藤岩雄逝去（7／16）新津市六郷：大正時代からチューリップ球根生産を始め県花卉球根農協長や新関村長などを歴任本県花卉園芸の発展に貢献した

【昭和54年】県切り花振興協議会（会長・丸山彦一）を設立、第一回県切花共進会を開催（中略）

【昭和57年】県園試はアザレアの開花調節技術を開発し、小合農協に実証圃の設置を委託し、普及した。県はアイリス球根の品質低下を改善するため緊急種子更新対策事業を実施。県のユリ切花出荷基準が設定された。堀之内町のユリ育種家・鈴木和太郎が新品種の「紅の舞」「金杯」を発表、種苗名称登録をした

【昭和58年】君知事などの園芸産地現地激励会が五泉市の一本杉のチューリップ畑及び浦興野花木産地で開催（5／6）また、園芸産地拡大総ぐるみ運動推進大会が1，200名を集めて新潟市公会堂で開催（11／11）

【昭和60年】県下のチューリップ切り花2haで150万本となり、以降生産が急速に拡大する

【昭和63年】県はチューリップフェスティバルなど「うるおい新潟園芸産地宣伝事業」を拡大改組「うるおい新潟農業宣伝事業」とし、他部門をふくめて実施。農林水産省は球根類の隔離検疫制度からチューリップ31品目を除外、以降漸次除外を拡大し、オランダから大量の球根類が輸入されるようなる。萩屋薫新大名誉教授はチューリップ新品種「メルヘンシリーズ」9品種を発表、名称登録を実施した

出典：園芸雑記帳　木村敬助
新潟県農産物価格安定協会1993～1995
＊紙面の都合により地域外は略